

[報告]

看護師による血小板献血推進活動 —献血者アンケートからみた今後の課題—

島根県赤十字血液センター

竹田章乃, 森江由美子, 横原鈴代, 田中英美子, 長谷川久美子,
野村奈都子, 山岡智恵美, 白石博子, 浦 博之, 前迫直久

Platelet apheresis promotion activity by nurses —Analysis of blood donor's answers to questions

Shimane Red Cross Blood Center

Akino Takeda, Yumiko Morie, Suzuyo Makihara, Emiko Tanaka, Kumiko Hasegawa,
Natsuko Nomura, Chiemi Yamaoka, Hiroko Shiraishi, Hiroyuki Ura and Naohisa Maesako

抄 錄

島根県は高齢化・過疎化が著しく、今後の血小板献血の安定確保が危惧されている。そこで当センターに来所する血小板献血者のきっかけ、意識、ニーズ等を明らかにし、今後の課題を考察するためにアンケート調査を実施した。その結果、看護師の説明・勧誘をきっかけに血小板献血を始めた献血者が最多であったこと、また、献血者の多くが血液製剤の用途を知りたいというニーズを持っている一方で、血小板献血の有効期限や用途の周知が不十分であることが分かった。今後、安定的に血小板献血者を確保するためには、看護師も積極的に血小板献血推進活動を行うことが重要であり、献血者のニーズに沿った情報提供が必要であると考える。当センターでは、アンケート結果を踏まえ、献血推進課と協働して看護師も推進活動に取り組んだ結果、平成25年度の血小板献血実績数は前年度を上回っている。今後も、安全に採血できる血小板献血者を確保するよう努めていく。

Key words: platelet apheresis promotion activity, blood donor

【はじめに】

島根県は総人口約70万人、高齢化率は全国第3位、生産年齢人口の割合は全国最低と、献血の担い手が非常に少ない県である。さらに東西に230kmと細長く、公共交通機関・道路交通網の発達も不十分である。また西部地区は過疎化が著しいため、血小板献血は県民50万人が住んでいる東部地区的献血者に頼らざるを得ないのが現状であり、今後の血小板献血の安定確保が危惧されて

いる（図1 島根県地図参照）。この問題に取り組むため、当センターでは、平成24年度末、献血推進課と採血課共同で血小板献血推進（母体強化）委員会を設置した。そこで、島根センターに来所する献血者の血小板献血への意識やニーズ等を明らかにし、血小板献血者確保のために看護師がどのような取り組みが行えるか、今後の課題は何かを考察することを目的に、アンケート調査を行ったので結果を報告する。

【方法および対象】

1. 方法：質問紙調査法
2. 対象：島根センターの固定施設に来所した血小板献血者
3. 期間：平成25年4月1～28日
4. 血小板献血者数：491名
5. 集計枚数：422枚（回収率85.9%）
6. 有効回答：414名

7. 質問事項

- a. 性別・年代・献血回数・職種・住んでいる地域
- b. 血小板献血を始めたきっかけ
- c. 来所した動機
- d. 献血に対する要望
- e. 血小板献血の有効期限について
（『はい・知っているが詳しくは知らない・いいえ』の3択）
- f. 血小板献血の用途について
（『はい・どちらかといえば、はい・いいえ』の3択）

【結果】

a) 性別・年代・献血回数・職種・住んでいる地域

調査期間内に来所した血小板献血者は、男性が8割を占めていた。年齢層は、10～20代の若年者層19%と2割にも満たず、約8割は30～50代

の中高年者層であった。献血回数は、10回未満13%，10～49回43%，50～99回22%，100回以上22%である。職種は、会社員が50%，公務員21%，自営業7%，大学生は6%，主婦が2%，高校生とその他の学生は1%以下、その他は6%。住んでいる地域は、島根センターがある松江市が61%，献血ルームふれあいのある出雲市が20%，安来市6%，雲南市4%と、東部地区4市で9割を占めており、東部地区に頼らざるを得ない現状が現れた結果であった。

b) 血小板献血を始めたきっかけ（図2）

図2を見ると、「看護師から説明を受けた」が最多であった。パンフレット・チラシによる効果、周囲の誘いもきっかけにはなっているが、職員からの説明、さらに、看護師から直接説明を受けた方が、献血のきっかけにより繋がりやすいものと考える。

c) 来所した動機（図3）

本日来所した動機を質問した。「定期的習慣」「役に立ちたい」が最多であった。要請による来所者が多いことも分かる。

d) 献血に対する要望（図4）

「献血した血液がどのように使われるか知りたい」が最多である。

e) 血小板献血者の理解度（図5）

血小板献血の有効期限および用途について、理解度を調査した。さらに、献血回数ごとに比較した。結果、献血回数が増えるごとに、献血者の理解度は高まる傾向にあるが、献血回数100回以上の献血者でも、有効期限、用途について知らないと回答する献血者もいた。とくに、用途については、献血回数100回以上の献血者でも34%の献血者が知らないと回答していた。

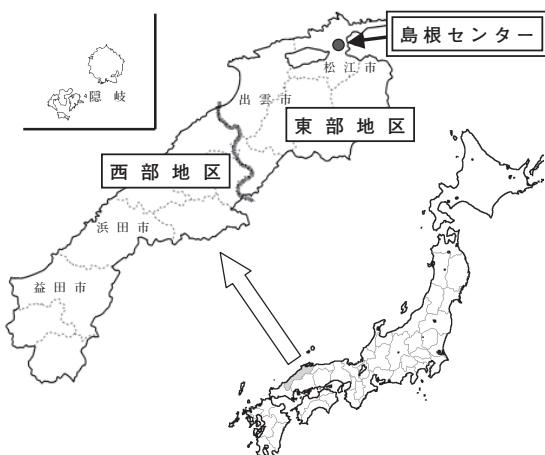


図1 島根県地図

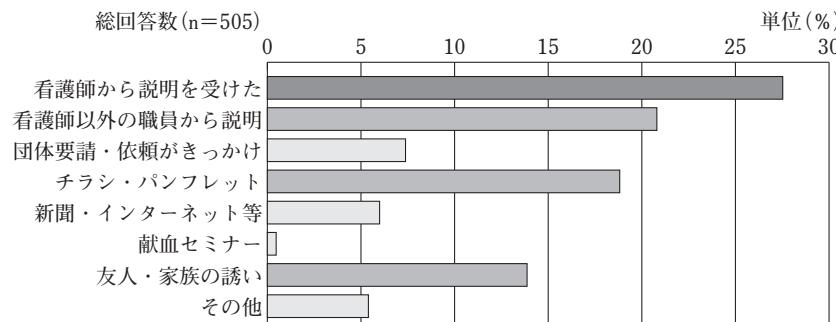


図2 Q. 血小板献血を始めたきっかけを教えて下さい。(複数回答可)

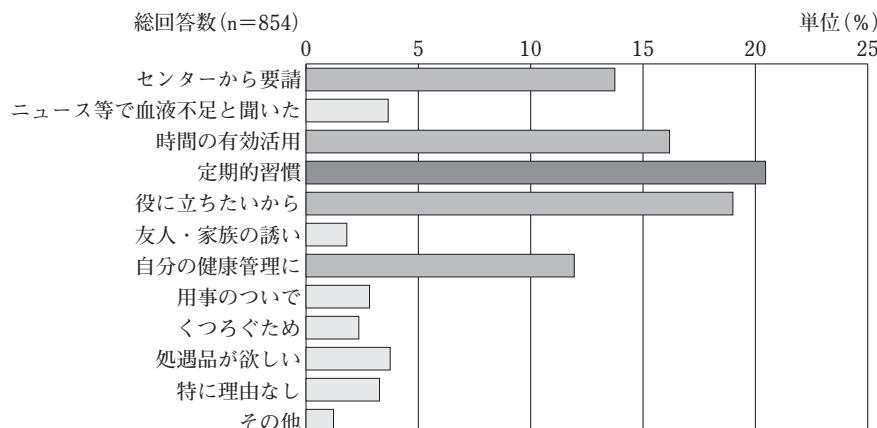


図3 Q. 本日来所した動機を教えて下さい。(複数回答可)

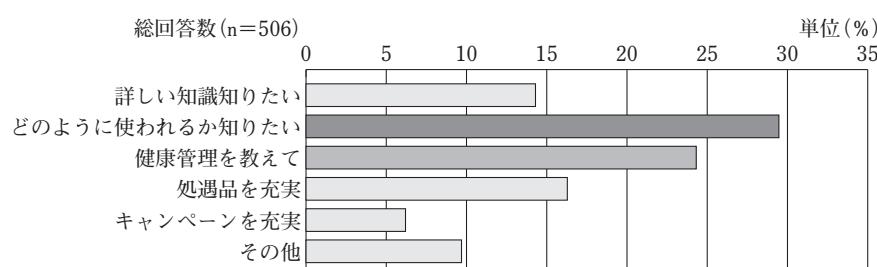


図4 Q. 献血に対する要望はありますか？(複数回答可)

【考 察】

年度初めに行った調査のため、新規学生の協力が少なかった可能性は考えられるが、島根センターの近隣に国立総合大学が立地しているにもかかわらず大学生の来所が少ない。今後は大学生等への啓発および対策を強化する必要がある。

また、今回の結果から、看護師による働きかけが血小板献血のきっかけになっていることが示唆された。看護師も意識を持って血小板献血者確保に努めて行くことが必要だと考える。

一方、有効期限や血液製剤の用途など、献血の必要性や意義を伝えていく努力が不十分であったことが解り、今後は「役に立ちたい」「どのように使われるか知りたい」という献血者の善意や思いに対し、必要な情報を還元していくことが必要である。

【島根センターの取り組み】

アンケート結果を踏まえて、島根センターでは、推進活動の見直しを図った。

1. 看護師の推進活動への参画

大学、官公庁、協力団体を中心に、看護師が血小板献血推進活動を行った。過去の検査データ、血管状態、本人の状況(VVRリスク等)等を見て、血小板献血に適する献血者を選定し、対象の献血者に説明および承諾を得て、要請可能な献血者としてリストアップした。

2. 血小板献血勧誘はがきの送付

リストアップした献血者に対し、献血推進課と協力し、次回の成分献血可能日を知らせる勧誘はがきを送付した。はがきは看護師がデザインし、

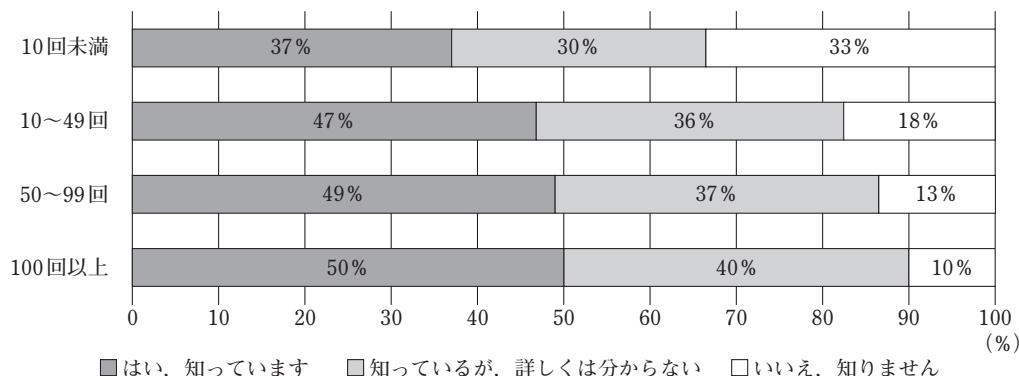


図5-1 Q. 血小板製剤の有効期限を知っていますか？（献血回数ごとの比較）

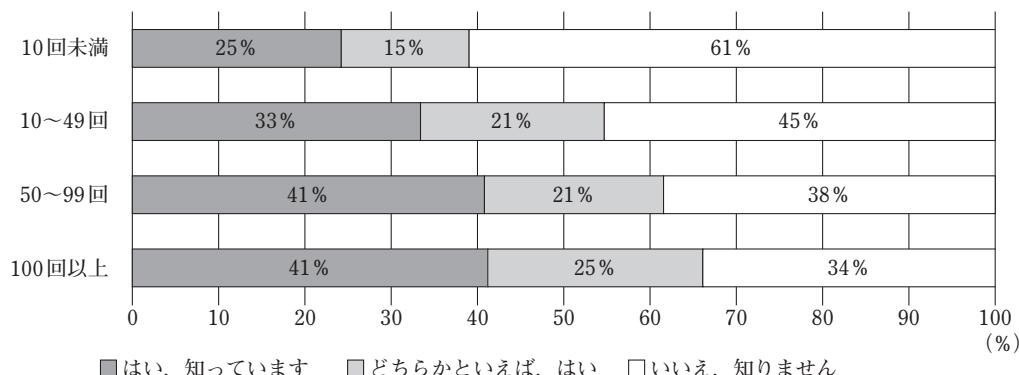


図5-2 Q. 血小板製剤の用途を知っていますか？（献血回数ごとの比較）

表1 島根センター母体 過去3年間の献血者数実績

		単位(人)	
	血小板献血者数	1カ月平均	400mL献血者数
平成23年度	4,791	400	1,122
平成24年度	4,615	385	1,189
平成25年度	4,678	425	1,212

※平成25年度は平成25年4月～平成26年2月の統計。

なお、ブロック化により、200mL献血・血漿献血は採血数を抑制しており、献血者数は大幅に減少している。

若年層向けの配色、季節感のあるものを作成した。

3. 血小板献血説明用リーフレットの作成

血小板献血説明用のリーフレットを新たに作成した。成分献血のしくみを図解し、アンケート結果を踏まえて血液製剤の種類、有効期限、用途を載せた。言葉はできるだけ平易な言葉を使用し、図を多用して視覚性を持たせた読みやすいものとなるように配慮した。

リーフレットは献血者の目に留まりやすいよう、休憩室、採血ベッドのオーバーテーブル上に設置した。

このリーフレットを活用することで、看護師の説明内容に統一化が図られ、より献血者の理解を得られるようになった。

4. 母体強化イベント

献血推進課と採血課共同で、月に数回の母体強化対策委員会を開催し、イベント・キャンペーンを企画するようにした。これにより、職員間の連携が強くなり、おもてなしの心で献血者を迎えるという気持ちを全職員で共有するようになった。

献血推進課と採血課が協力し、これらの活動に取り組んだ結果、平成25年度の血小板献血実績数は、前年度を上回るようになった（表1）。

【おわりに】

看護師が血小板献血推進活動を行う意義は、献血者が血小板献血に適し安全に採血が可能であるかを判断することができること、また、医療者である看護師が血小板献血について説明することで、献血者の信頼と理解を得られやすい点にあると考える。さらに、採血を行う看護師は、献血者と接する時間も長いため、献血者の生活背景を捉えやすく、そこから推進における手がかりを引き出すことができるため、新規・複数回献血者を確保する上で、看護師の働きかけは重要な役割を果たすものと考える。

献血者確保は、血液センター職員全員で取り組むべき問題であり、献血推進課と協力し合い、今後も全職員で血小板献血の安定確保に努めていきたい。